

Career Education in High School Home
Economic: A Questionnaire Survey of High
School and University Students

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 陽子, 勝山, 郁美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028692

高等学校・家庭科におけるキャリア教育のあり方（第二報）

—高校生と大学生における実態把握と課題—

村上 陽子*, 勝山 郁美**

Career Education in High School Home Economic: A Questionnaire Survey of High School and University Students

Yoko MURAKAMI* and Ikumi KATSUYAMA**

Summary

Life events such as pregnancy, childbirth, and childcare have a significant impact on life plans. Therefore, sex education related to life plans is considered part of career education. In this study, we examined issues related to sex education in order to clarify the purpose of career education in high school home economics. A questionnaire survey on sex education was conducted among high school and college students. Most of the high school students obtained information about sex through their friends, and university students through school classes and textbooks. Both high school and university students used the internet to search for information about sexual issues. The university students thought they didn't have sufficient sexual knowledge and felt they needed to learn about sex. All high school and college students wanted to receive appropriate and practical sex-related education. Sexuality education is considered essential in guiding youth people to develop healthy and appropriate life plans. It is very important to provide teachers with accurate and up-to-date sex education information and teaching methods so that they can effectively teach students in schools.

キーワード：性教育 sex education, キャリア教育 career education, 高校生 high school student, 家庭科 home economics.

1. 緒言

近年、産業・経済の構造的変化に伴う雇用の多様化や流動化など、日本の産業・職業界には構造的変革が生じており、子ども達自らの将来のとらえ方にも多大な影響をもたらしている¹⁾。絶えず変化する現代社会においては、子ども達が将来に希望を抱き、自分の人生を自立的に切り拓いていくことができる教育が強く求められている¹⁾。そのためには、日常の教育活動を通じて、学ぶ面白さや学びに挑戦する意味を子ども達に体得させることが重要であり、その一端を担うのがキャリア教育である。

本研究では、性教育や妊娠・出産・子育てなどに関する教育を「キャリア教育」として位置づけ、これからの社会を生きていく生徒に必要な性教育を含めたキャリア教育を、家庭科で行うことを目的とする。キャ

リア教育を行う対象を、大人社会の直前の準備期間である高校生として、家庭科におけるキャリア教育のあり方を検討し、授業モデル構築を目指す。

本研究の構成は、①キャリア教育に関する各教科の取り組みと課題の把握、②子育て経験者へのアンケートからみる現在の性教育の課題の把握、③大学生における実態把握と課題、④高校生における実態把握と課題、⑤家庭科におけるキャリア教育に関する教材研究および教材開発、⑥大学生と高校生に対する授業実践および成果と課題、⑦キャリア教育教材の改善と実践となっている。家庭科におけるキャリア教育に関する授業モデルの構築および実践により、生徒が今後の人生に必要な知識や技能を身につけ、見通しをもってよりよい人生を設計したり選択したりする力を育むことができると考えられる。

*家政教育系列, **静岡県立相良高等学校

前報²⁾において、キャリア教育の意義や内容や学校教育における課題を検討した。その中で、①進学・就職・結婚・出産・子育てなどのライフイベントは生き方や人生のあり方に大きく影響するものであること、②キャリア教育の一環として妊娠・出産・子育てなどに関わる性教育が必要であること、一方で、③我が国では性に関する教育はキャリア教育と切り離されて考えられているため、キャリア教育が十分機能していないこと、④人生設計を考慮に入れた広い視点での教育が求められること、⑤家庭科がキャリア教育において重要な役割を担うことを明らかにした²⁾。さらに、妊娠・出産・子育ての経験者の意見を授業に取り入れた授業モデル構築の一助として、子育て経験者を対象にアンケート調査を行った結果、妊娠や出産・子育てなど性に関する教育は、職業や人生設計などキャリアに関わる教育と関連付けて学ぶ必要があることが示唆された²⁾。

高等学校・家庭科における、性教育を含めたキャリア教育を構想するにあたり、現状と課題を把握する必要がある。そこで本稿では、子育て経験者の調査から得られた課題²⁾をもとに、アンケートを作成し、高校生と大学生に質問紙調査を実施し、特に性教育における実態と課題を把握することとした。

2. 方法

(1) 調査方法および調査対象、調査期間

調査対象は、静岡県立相良高等学校3年生(女性14人、男性1人)、および、静岡大学教育学部3～4年生(女性19人、男性7人)である。以下、それぞれ「高校生」「大学生」と表記する。これら調査対象者は、本調査後に、性教育を含めたキャリア教育に関する授業を実施予定である。調査方法は、自記式質問紙法で行い、回収は留置き法を用いた(有効回収率・回答率100%)。調査期間は2019年1月～2019年3月である。

(2) 調査内容

調査内容は、①性に関する知識の入手方法、②妊娠・出産・子育てに関する知識の学習状況などである。得られた回答は、 χ^2 検定により有意差を検討した。

1) 性に関する知識の入手方法

性に関する知識の入手方法は、選択肢による複数回答とした。選択肢の内容は、「学校関係」「周囲の人」「SNSやメディア」のように3つに分類した。学校関係は「学校の授業や教科書」「学校の先生」、周囲の人は「友人」「家族」「恋人」「先輩」、SNSやメディアは「インターネット」「雑誌・漫画」「アダルトビデオ」「ポルノ雑誌」「その他」を設定した。尚、「アダルトビデオ」と「ポルノ雑誌」は、アンケート協力を依頼した高校教員からの要請により、選択肢か

ら削除して実施した。

2) 妊娠・出産・子育てに関する知識の学習経験、定着度、必要性

妊娠・出産・子育てに関する知識について、質問項目を27個設定した。質問内容の設定方法は、まず、「わが国の性教育の課題と現状」³⁾より抜粋した小学校・中学校学習指導要領における性教育に関する用語から、保健体育科より12個、家庭科より7個を選出した。次に、これらと前報²⁾で設定した選択肢(32項目)とを比較し、高校生や大学生に対する質問項目として不足しているものを追加し、27項目とした。これらを内容により、「性の発達」「性感染症」「妊娠・避妊」「結婚」「子育て」に分類して分析した。27項目の詳細と分類は、図2～図7に示す。

高校生・大学生を対象として、27項目について、「学校で学習した(体験した)か」「自分の知識として定着しているか」「自分に必要な知識だと思うか」を「はい・いいえ」のいずれかを選択してもらった。これら質問の設定理由は、性教育や妊娠・出産・子育てに関する教育について「自分の知識になったか。学んだ教育が、実際に役に立つものとして自分の身になったか」という意識を問うためであり、ここでの定着度とは、一問一答式や正誤問題などのテストにより測定されるような知識の内容の確認を意図したのではなく、本人の意識の中での定着度であることを予め断っておく。

3) 性に関する知識の習得と実践の可否

性に関する知識の習得とその実践の可否について、どのように考えているのか検討した。「全体として、学校における性教育や妊娠・出産・子育ての教育について、現在のあなたに当てはまるものを1つ選んでください」という質問を設定し、自分の知識としての考え、および、必要性を検討した。前者の選択肢として、「自分の知識として定着しており、そのような場面になれば実践できる(と思う)」「自分の知識として定着しているが、そのような場面では実践できない(と思う)」「自分の知識として定着していない」「その他」を設定し、1つを選択してもらった。後者については「自分に必要な知識だと思う」「思わない」「その他」のいずれか1つを選択してもらった。また、「学校における性教育についての考え」と「学校における性教育や妊娠・出産・子育てについて印象に残っている授業(講座)」を、自由記述で答えてもらった。

(3) 倫理的配慮

本研究は、静岡大学の「静岡大学ヒトを対象とする研究に関する規則」に則り、本学の研究倫理委員会に倫理申請し承認されたものである(承認番号18-40)。

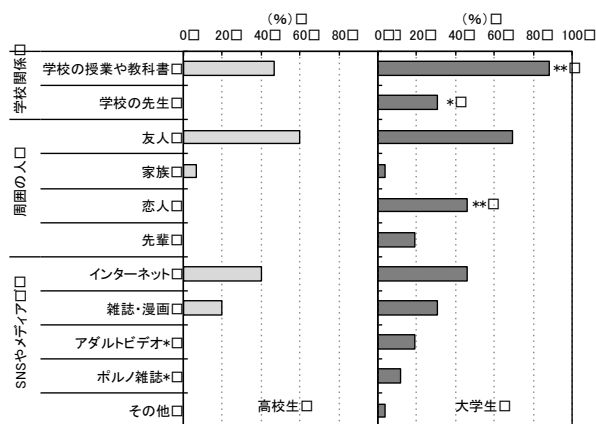


図1 性に関する知識の入手方法(複数回答) (%)

※性に関する知識の入手方法について、複数回答にて検討した。尚、高校生については、「アダルトビデオ」「ポルノ雑誌」は選択肢から除外した。高校生と大学生との間で有意差がある場合は、大学生のパーの上に記した(χ^2 検定、** $p<0.01$ 、* $p<0.05$)。□

3. 結果および考察

(1) 性に関する知識の入手方法

1) 高校生と大学生の比較

性に関する知識の入手方法を図1に示す。高校生において、最も多かった入手方法は「友人」(60%)であり、次いで「学校の授業や教科書」「インターネット」であった。大学生では「学校の授業や教科書」が最も多く、次いで「友人」「インターネット」「恋人」と続いた。

両者を比較すると、入手方法で有意差が見られたのは、「学校の授業や教科書」($p<0.01$)、「恋人」($p<0.01$)、「学校の先生」($p<0.05$)であり、いずれも大学生の方が高かった。また、入手方法の種類は、高校生は1人あたり1.7種類であったのに対し、大学生は3.7種類と、大学生は様々な方法で知識の入手を試みていることが明らかとなった。

高校生・大学生とも、共通して「友人」の回答が多かった(両者間で有意差なし)。このことから、高校生や大学生の日常会話の中で、性に関する会話や情報交換が行われていることが示唆された。また、「インターネット」と回答した割合も両者ではほぼ同じであり、性に関する情報収集ツールとして、インターネットが身近なものになっているといえる。

2) 知識の提供源および相談役としての学校の役割

「学校の授業や教科書」は大学生で特に多く、高校生でも約5割が選択していたことから、学校現場における性教育の重要性が窺える。一方、「学校の先生」を回答した高校生は0人であった。性について「友人」とは話していることから、性に関する興味やニーズはあると思われるが、教員に相談する機会がない、あるいは、相談相手として教員を選ばないと考えられる。

その理由として、高校生自身が教員に相談をしたいと思っていないこと、教員自身も性に関する問題について積極的に相談に乗る姿勢を生徒に見せていない

(見せられない)ことの2つが考えられる。樋谷ら⁴⁾の調査によると、高校生からの性に関する相談を「受けたくない」「どちらともいえない」と回答した教員は約90%と報告されており、その理由として「対応に自信がない」「対応に時間がかかる」などが挙げられている。松岡ら⁵⁾は、現在の高校の性教育は、高校生の性に対する意識等の実態に応じた学びある内容とはなっていないことから、充実の必要性を言及している。数見⁶⁾は、性教育の内容不足・不十分の要因として、時間確保の問題、有効な指導方法がわからないといった問題に加えて、教員が性の問題は基本的にプライベートであり家庭における問題と考えていること、性教育を行うという意識に向かう教員が少ないことなどを挙げている。また、古山ら⁷⁾は、高校生に対して性に関する教育的支援を行う際に、教員がとるスタンスや、関連する性意識や性に対する価値観が、高校生と大きく乖離していること、性教育を推進する上で援助者となる教員の知識と態度が生徒との関係性の構築に影響を及ぼすことを指摘している。生徒が性に関する相談しやすい雰囲気を作るためにも、教員の性教育に関する理解を深める必要があるといえる。

高校における性に関する相談の場の環境づくりは、高校生を取り巻く性の問題が、彼らの人生を左右することがあるため、非常に重要である。たとえば、性の問題の一つに人工妊娠中絶が挙げられる。思春期における人工妊娠中絶の総数は減少傾向にありながら、高校では増加している⁸⁾。高校生の性が日常する一方、中・高校生が習得している避妊情報の怪しさや乏しさ、不確実な避妊の関係性が懸念されている⁹⁾。また、妊婦の当事者となる女子高生の避妊の行動と性知識の関連の検討¹⁰⁾では、「不確実な避妊」をする者は、学校での情報より友人や交際相手経由で避妊情報を得る者が多くとされている。性の健康医学財団¹¹⁾では、妊娠した高校生の相談相手は友人やパートナーであることが多く、未熟な者同士で悩みを相談し合っている現状を懸念している。十分な知識もないまま、妊娠・中絶・出産をすることに大きな負担を負うのは女子である。そのため、高校生までに科学的な性知識を持つように家庭や学校で教育していくこと、妊娠などの悩みを抱えたとき、身近にいる大人(教師、保護者)が相談相手となること、適切な支援ができるよう教師達も避妊に関する知識を持つ必要があると提言している¹¹⁾。

(2) 性に関する知識に対する学習経験

妊娠・出産・子育てに関する知識について27項目を設定し、学校での学習経験の有無を検討した。ここでは「学習経験あり」を学習群、「学習経験なし」を未学習群として記す。図2に「性の発達、性感染症、妊娠・避妊」に関するもの(14項目)、図3に「結婚



図2 性の発達、性感染症、妊娠・避妊に対する学習経験

※性に関する知識(性の発達、性感染症、妊娠・避妊)に関する学習経験の有無について検討した。経験の有無で有意差がある場合は、それぞれの校種の「ある」のバーの上に記した。高校生と大学生との間で有意差がある場合は、大学生のバーの横に記した(χ^2 検定、** $p<0.01$ 、* $p<0.05$ 、+ $p<0.1$)。□



図3 結婚や子育てに対する学習経験

※性に関する知識(結婚、子育て)に関する学習経験の有無について検討した。経験の有無で有意差がある場合は、それぞれの校種の「ある」のバーの上に記した。高校生と大学生との間で有意差がある場合は、大学生のバーの横に記した(χ^2 検定、** $p<0.01$ 、* $p<0.05$ 、+ $p<0.1$)。□

や子育て」に関するもの(13項目)の結果を示す。各校種における学習群と未学習群の相違は、学習群のバーの上に示した。高校生と大学生との間で相違がある場合は、大学生のバーの横に記した。

1) 高校生

「性の発達、性感染症、妊娠・避妊」に関する学習経験をみると、「コンドームの使用方法」以外は学習群が未学習群よりも有意に高かった(図2)。

「結婚や子育て」に対する学習経験では、すべての項目について学習群が未学習群よりも有意に高かった(図3)。高校生は27項目中26項目について、学習群が未学習群よりも有意に高かった。

2) 大学生

「性の発達、性感染症、妊娠・避妊」をみると、

「コンドームの使用方法」と「卵子の老化」以外は、学習群が未学習群よりも有意に高かった(図2)。

「結婚や子育て」は、結婚に関する3項目中2項目(「健康的な結婚生活」「結婚生活を健康に過ごすための保健・医療サービスの利用」)、子育てに関する13項目中4項目(「子育ての方法」「子育ての楽しさ」「子育ての大変さ」「子育てに関わるお金」)について、学習群と未学習群との間で相違がみられなかった(図3)。大学生において、学習群が未学習群よりも有意に高かったのは27項目中21項目であり、高校生と相違がみられた。

3) 高校生と大学生の比較

高校生と大学生を比べると、「性の発達、性感染症、妊娠・避妊」は、「人工妊娠中絶」以外、高校生と大

学生の間で学習経験の有無に相違は見られなかった(図2)。一方、「結婚や子育て」では、13項目中7項目において高校生の方が大学生より学習群が有意に高かった(図3)。

この違いの理由として、大学生が①中学校・高校で学習していない、②学習したが忘れている、③学習したが、自分が必要と思う内容を学習していない、などが考えられる。①は、学ぶべき学習をしていない、学習内容が充実していないということ、②は学習者が自分に必要なものとして印象に残っていないということが考えられるため、③にも繋がるといえる。これらは、扱う内容と指導のあり方に課題があると考えられる。

大学生において、中学・高校で学んできた性教育の学習内容が十分でない、必要とする内容が充実していないこと(あるいはそう考えていること)の要因は、性教育の位置づけの曖昧さと、担当科目・担当教育者の偏りが考えられる。我が国では、性教育の担当教科は保健体育、担当教育者は保健体育教員が大半であるため、内容や時間数に偏りや限界がある^{12) 13)}。また、その指導や内容は教員の裁量に任されているため、学習内容に偏りがあることや³⁾、性パッシングなどの影響により無難な内容の性教育に流れていること⁶⁾、性教育に対して消極的な教員が多いこと⁶⁾などの問題が指摘されている。また、学習指導要領に示された「性に関する箇所」の表現は極めて表面的であり、明確な性教育の内容を示すものではない^{14) 15)}。

性教育は、学んだ知識を実際の生活や人生に活用できてこそ意味をなすものである。教員は、児童生徒の現状と課題を把握するとともに、その内容や指導方法を向上させるとともに、学校全体として体系的に性教育に取り組んでいく必要があるといえる。

(3) 性に関する知識の定着度

妊娠・出産・子育てに関する知識 27項目について、学習の定着度を検討した。「定着している」を定着群、「定着していない」を未定着群として記す。図4に「性の発達、性感染症、妊娠・避妊」(14項目)、図5に「結婚や子育て」(13項目)の結果を示す。

1) 高校生

「性の発達、性感染症、妊娠・避妊」をみると、「男子の射精」「卵子の老化」は定着群・未定着群の間で相違がなかった(図4)。それ以外は定着群が未定着群よりも有意に高かった。

「結婚や子育て」では、すべての項目について定着群が有意に高かった(図5)。高校生は27項目中25項目について、定着群が未定着群よりも有意に高かった。

2) 大学生

「性の発達、性感染症、妊娠・避妊」について、定着群が未定着群よりも有意に高かったのは8項目、定着

群より未定着群の方が高かったのは1項目、有意差がなかったものが5項目であった(図4)。

「結婚や子育て」について、定着群が未定着群よりも有意に高かったのは6項目、定着群より未定着群の方が高かったのは3項目、有意差がなかったものが4項目であった(図5)。

未定着群が有意に多かった3項目(「健康な結婚生活」「結婚生活を健康に過ごすための保健・医療サービスの利用」「子育ての方法」と、有意差がなかった3項目(「子育ての楽しさ」「子育ての大変さ」「子育てに関わるお金」)の6項目は、学習群と未習群との間で相違がなかった項目である。また、学習群が有意に高かった「家族計画の意義」は、定着群と未定着群との間で相違がみられなかった。これらのことから、学習経験があっても定着していないことが推測される。そこで、学習経験と定着度との関係について検討した。

(a) 学習経験と定着度との関係

学習経験と定着度の間で有意差があったのは、高校生0項目、大学生5項目であった。大学生において、学習経験と定着度の関係は3つのタイプに分類された。

第一に、学校での学習経験は高いものの、定着度が有意に低下したものであり、3項目であった(「性感染症」「エイズ」「受精・妊娠・出産とそれに伴う健康課題」)。

第二に、学校での学習経験自体が低く、さらに定着度が低下したものであり、1項目であった(「結婚生活を健康に過ごすための保健・医療サービスの利用」)。

第三に、学校での学習経験自体は低いものの、定着度が有意に増加したものであり、1項目であった(「コンドームの使用法」)。

コンドームに関しては、中学校の保健体育で、性感染症の予防としてのコンドーム使用の有効性については触れられているが、コンドームの正しい使用法などは指導外である²⁾。また、高校での「コンドームの使用法」の取扱いには制限が大きいのが現状である¹⁶⁾。そのため、学校ではなく、生活の中で使用法を習得したと考えられる。

高校までの性教育は、避妊・中絶、性感染症などに関する総論的教育が多く、大学生になってから必要となってくるパートナーとの関係性の作り方、コミュニケーション、悩みへの対処、LGBTなど、生きる力に直接かかわる内容は育成されていないことが指摘されている¹⁷⁾。

大学生では、性に関する知識の入手方法として「恋人」という回答が高校生より多かったことから(図1)、パートナーと豊かな人生が送ることができるように、妊娠・出産に関する知識やライフプランなどを考慮に入れた広い視点での教育と、その定着を図るた



図4 性の発達、性感染症、妊娠・避妊に対する学習の定着度

※性に関する知識(性の発達、性感染症、妊娠・避妊に関する学習の定着度について検討した。定着度の有無で有意差がある場合は、それぞれの校種の「ある」のバーの上に記した。高校生と大学生との間で有意差がある場合は、大学生のバーの横に記した(χ^2 検定、** $p < 0.01$ 、* $p < 0.05$ 、+ $p < 0.1$)。□



図5 結婚や子育てに対する学習の定着度

※性に関する知識(結婚、子育て)に関する学習の定着度について検討した。定着度の有無で有意差がある場合は、それぞれの校種の「ある」のバーの上に記した。高校生と大学生との間で有意差がある場合は、大学生のバーの横に記した(χ^2 検定、** $p < 0.01$ 、* $p < 0.05$ 、+ $p < 0.1$)。□

めの学習内容や指導における工夫が必要といえる。

3) 高校生と大学生の比較

高校生は、定着群が未定着群より有意に高かったのは27項目中25項目、2項目は両者で相違がなかった。大学生では、定着群が有意に高かったのは14項目、未定着群が高かったのは4項目、両者で相違がなかったのは9項目で、高校生と相違がみられた($p < 0.01$)。

定着度について高校生と大学生を比較すると、11項目に有意差がみられ、いずれも高校生の方が高かった。カテゴリー別では、「結婚」や「子育て」に関する項目が多く、「妊娠・避妊」「性感染症」と続いた。

高校生の方が大学生に比べて定着群の割合が高いのは、前述したように、高校までの性教育が総論的・表層的なものであるためと考えられる。

大学生の定着度が低いのは、性に関すること(妊娠・避妊、結婚、子育てなど)がより現実的で身近なものになり、自分の必要な情報と獲得した知識との間で乖離を感じているためと考えられる。大学生を対象とした調査¹⁷⁾では、生理的・生物学的内容、避妊法などは学習しているが、性のもつ多様な意味や心理的側面、不安や悩みの相談の仕方などは学んでいないなど、学習内容に偏りがあることが報告されている。林¹⁸⁾は、大学生の性行動に伴うライフスキルが習得されていない現状から、高校までの性教育が具体的な知恵として身につけていないと指摘している。こうしたことが定着度の低さに影響していると考えられる。

(4) 性に関する知識の習得に対する必要性

妊娠・出産・子育てに関する知識27項目について、学習の必要性の有無を検討した。「学習の必要がある」

を必要群, 「必要はない」を不要群として記す。図6に「性の発達, 性感染症, 妊娠・避妊」(14項目), 図7に「結婚や子育て」(13項目)の結果を示す。

1) 高校生と大学生の比較

高校生についてみると, 「男子の射精」以外は必要群が有意に高かった(図6, 図7)。大学生は, 27項目全てについて, 必要群が有意に高かった。

高校生と大学生との相違をみると, いずれの項目についても有意差はみられず, 両者とも性に関して学習の必要性を感じているといえる。

一方, 高校生・大学生ともに, 「男子の射精」を「自分に必要でない知識」として回答した者が若干名いた。これは, 月経や射精に対する教育の扱いのあり方や, 考え方の相違が要因として考えられる。

月経教育は, 小学校4年生女子に行われる。一方, 射精教育を中心にした男子への性教育は十分ではない

ことが指摘されている³⁾。さらに, 女子にとって射精は異性の体の仕組みであること, また, 男女ともに射精について学ぶ機会が少なく, 必要性を実感できないため³⁾, このように回答したと予想される。

月経も射精も, 男女ともに相互理解に必要な知識であり, 本来はいずれも小学校で学習する内容である¹⁹⁾。そこで, 現在の性教育の課題を明らかにする一助として, 月経教育と射精教育を対比させて両者の課題を検討した。

2) 月経・射精教育の必要性の相違の要因

(a) 月経教育

月経教育の課題として, 実施時期・実施状況, 学習内容, 発達や性別などに応じた指導のあり方, 指導体制などが挙げられる。

実施時期・実施状況について, 学習指導要領には,

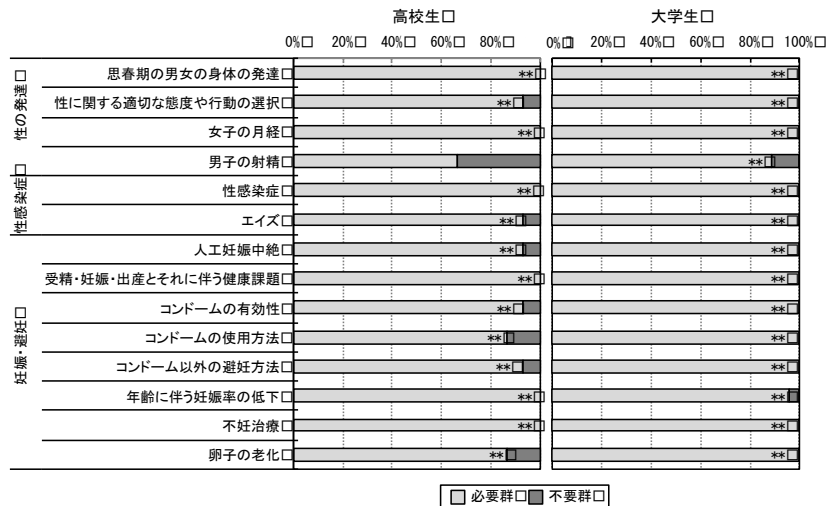


図6 性の発達、性感染症、妊娠・避妊に対する学習の必要性

※性に関する知識(性の発達、性感染症、妊娠・避妊に関する学習の必要性について検討した。必要性の有無で有意差がある場合は、それぞれの校種の「ある」のバーの上に記した。高校生と大学生との間で有意差がある場合は、大学生のバーの横に記した(χ^2 検定、** $p < 0.01$, * $p < 0.05$, + $p < 0.1$)。



図7 結婚や子育てに対する学習の必要性

※性に関する知識(結婚、子育て)に関する学習の必要性について検討した。必要性の有無で有意差がある場合は、それぞれの校種の「ある」のバーの上に記した。高校生と大学生との間で有意差がある場合は、大学生のバーの横に記した(χ^2 検定、** $p < 0.01$, * $p < 0.05$, + $p < 0.1$)。

小学校第3・4学年で初経教育の記載があるが¹⁹⁾、中学・高校では月経に特化した内容ではないため、中学での指導状況は不十分であることが報告されている²⁰⁾。

学習内容についてみると、小学校学習指導要領解説体育編では「思春期になると次第に大人の体に近づき（中略）、初経、精通などが起こったりする」¹⁹⁾、中学校学習指導要領解説保健体育編では「思春期には（中略）生殖器の発育とともに生殖機能が発達し、男子では射精、女子では月経が見られ、妊娠が可能となる」²⁰⁾とあるが、いずれも具体的な内容は記載されていない。これについて高橋²¹⁾は、月経教育と一言でいっても、月経の仕組み・意義、月経前症候群、月経の記録と観察、基礎体温の測定と記録、月経中の生活、月経異常、さらには妊娠や避妊の仕組みにまで繋がるものであり、初経教育だけでおさえられるものではないとしている。

さらに、発達や性別に応じた指導については、上記内容以外にも、月経に対する否定的イメージ、特に否定的感情への対応が求められる。高校生男女を対象とした初めての月経教育に対するイメージ調査²²⁾によると、男子は月経を肯定的・中立的にとらえているのに対し、女子は否定的・両価的にとらえる者が多く、男女間で感じ方に相違があることが報告されている。高橋²¹⁾は、月経に対して否定的感情を抱きやすい18歳までの時期を、できるだけ速やかに肯定的感情に転じさせるためにも、家族との関わりや、成長段階に応じた教育の積み重ねが必要としている。

月経については、国際セクシュアリティ教育ガイドランス²³⁾においても、「月経は一般的なことで、女子の身体的発達の自然な一部であり、秘密やスティグマとして扱われるべきではない」と記載されており、その学習目標として、「ジェンダー不平等が月経中の女子の恥ずかしさや恐れのお気持ちにどのように影響しているかを再認識する」ことが挙げられている（同ガイドランス「キーコンセプト6 人間のからだと発達」）。

月経教育については様々な課題が報告されているが、こうした課題をもとに、肯定的な月経イメージを形成するような月経教育の内容や方法を研究していく必要があるといえる。

(b) 射精教育

射精について、学習指導要領の記載は上述したとおりであり、月経同様、具体的な内容は記載されていない^{19) 20)}。さらに、月経に対して、射精に関する研究は非常に乏しく、教育のみならず医療や保健関係においても数少ないのが現状である。

中高生を対象とした月経・射精に関する調査²⁴⁾では、①射精に対するイメージは月経より希薄、②月経／射精と生殖の結び付きが漠然としている、③射精は罪悪感・羞恥心を伴うものと考えられている、④射精

経験が月経経験よりも公的に語られにくいという傾向があり、その背景として、①性（性的欲望や性的欲求）に関して語ることがタブー視されている、②女性の身体は特別なケアが必要なものとみなすが、男性の身体には特別なケアの必要を認めない、③生殖との繋がりについて、特に女性の身体が重視されているなどがあり、射精はその現象の性質から性的欲求との関わりが強いと、公的に語られにくいと報告されている。

男子を対象とした調査²⁵⁾によれば、男子の15%が射精を「汚らわしい」、20%が「恥ずかしい」などのイメージをもっており、射精に対する肯定感の低さが報告されている。村瀬²⁵⁾は、男子の射精に対する肯定感の低さを問題視し、これは「男子の性」自体がこれまで放置されてきた結果であり、これが現実の性意識や性関係に影響を与えているとしている。村末²⁶⁾は、中学生への聞き取り調査から、生徒が性行動の問題に直面し苦慮していることから、教育現場ではタブー視・敬遠されがちな「性交」についても「しっかりと内容として扱ってほしい」という要望があったとしている。妊娠や性感染症など、生徒が今後直面するであろう内容「射精」について、「性交」を抜きに伝えることは不可能・不十分であり、この要望自体当然のものと言及している。

(c) まとめ

月経や射精は、小学校で学習すべき内容と記載されており¹⁹⁾、人として自然におこる成長であり身体的発達である。しかし、性に関わることは十分に学習が行われていない現状と課題が明らかとなった。また、それぞれの身体の仕組みについて、否定的なイメージをもっていることが示唆された。女子が抱く「月経」への否定的イメージや、男子が抱く「射精」への否定的イメージを払拭するには、月経教育・射精教育をはじめとした体系的な性教育を充実させる必要がある。その際、性を人生という長い視点でとらえること、人生設計という広い視点からとらえること、生活という身近な視点からとらえること、児童生徒の実態や発達段階をふまえて課題を設定すること、性に関する科学的な内容に基づいて行われることが必要といえる。

高橋²¹⁾は、中・高校生が月経教育に求めることの一つとして、男女同士思いやる気持ちを育てるために、男女共習の必要性を挙げている。かつて初経教育は女子のみに行われており、女子は月経の仕組みを知らない男子の前で、肩身の狭い思いをしてきた背景がある²¹⁾。射精教育もこれと同様であり、男女が互いの身体や心の特徴を知り、互いを大切にしていけるようにするには、男女ともに互いの身体の仕組みや変化を学び、性について話し合っていける力や関係性を育成していくことが必要であり、男女ともに学ぶことの意義は大きいといえる²¹⁾。本研究で調査した27項目は、学習指導要領に直接記載がないものも含まれているが、

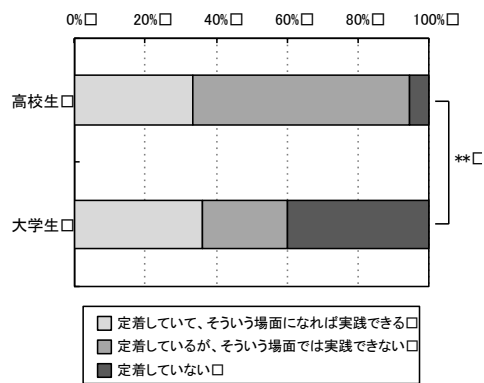


図8 習得した性に関する知識の定着度と実践の意欲
高校生と大学生の相違は χ^2 検定により検討した(** $p < 0.01$)。□

高校生や大学生はそうした知識に対しても必要性を感じていた。このことから、児童・生徒が実りある人生設計を描けるように、教員は実態把握を行うとともに、保護者とも協力して、正しい知識や展望をもって、性教育を含めたキャリア教育を行う必要があるといえる。

(5) 全体としての知識の習得と実践度

高校生や大学生が、性に関する知識の習得とその実践の可否についてどのように考えているのか検討した。

1) 自分の知識としての定着度と実践の可否

性に関する知識について、自分の知識としての定着度と実践の可否について検討した。その結果、高校生と大学生で相違がみられた($p < 0.01$, 図8)。

性に関して、「自分の知識として定着しており、そのような場面になれば実践できる」は高校生と大学生とも3割程度であったが、「自分の知識として定着しているが、そのような場面では実践できない」は高校生64%であったのに対し、大学生は24%と有意に低く、また大学生は「知識として定着していない」が40%であった。このことから、高校生・大学生とも、性に関する知識「定着しているか」「実践できるか」と問われると、「自信がない」者の方が多いといえる。

岡部ら²⁷⁾が大学生を対象とした研究では、高校時代の性教育が役立っているかについて「どちらとも言えない」が最も多く(45.8%)、「とても役立っている」と「役立っている」の合計が42.7%であった。これらのことから、学校現場における性教育は、知識だけでなく、ロールプレイングなど、実際の場面を想定し、その知識がどのように活用されるかを実感できる授業づくりが必要といえる。

2) 知識の必要性

性に関する知識について、高校生・大学生とも全員が「自分に必要な知識だと思う」と回答していた。

高校生や大学生になると、男女交際をする機会も増えてくるため、知識が必要になる場面が増加する。青

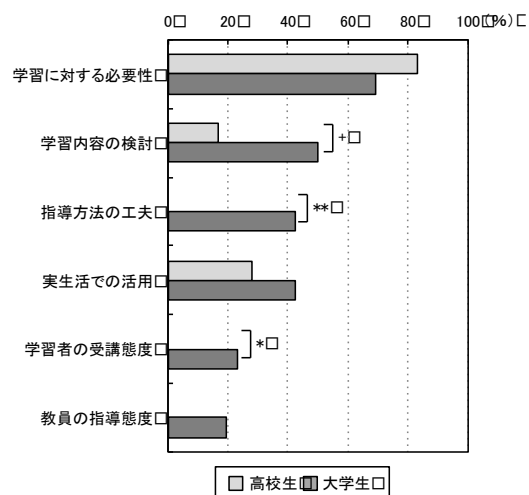


図9 学校の性教育に対する意識(自由記述、複数回答)
高校生と大学生の相違は、 χ^2 検定により検討した(** $p < 0.01$, * $p < 0.05$, + $p < 0.1$)。□

少年の性行動調査¹⁶⁾によれば、デートの経験率は男子大学生77.1%、女子大学生77.0%、高校男子53.1%、高校女子57.7%、中学男子24.7%、中学女子21.8%であり、高校生・大学生で経験率が上がっている。進路を考える時、また、パートナーを得た際に、妊娠・出産・子育てに関する知識が必要になる。高校生や大学生は性に関する知識を必要だと感じていたことから、今以上に高校や大学でも性教育を含めたキャリア教育を受ける機会が必要といえる。

(6) 学校における性教育や「妊娠・出産・子育て」に関する教育の印象(自由記述)

学校における性教育や「妊娠・出産・子育て」に関する教育について、意見を自由記述で回答してもらった。回答内容からキーワードを選出し、図9に示した。

1) 高校生と大学生の比較

高校生と大学生を比べると、大学生の8割が、性教育の内容について「現在(または、ごく近い将来)、自分に関わること」として捉えていたのに対し、高校生ではそうした具体的な記述はみられなかった。

2) 大学生の印象

大学生は、学習内容、指導方法、実生活での活用を4割以上が挙げていた。

一例を挙げると、学習内容に関して「出産や子育ては、学校ではほとんど学習した記憶がありません。医療制度や政策など、子育てをする上で必要となるものは知識として知っておきたい」、「男女関係なく、性教育・妊娠・出産・子育てについては、身につけておくべき知識。教育の意義を再確認し、実践していく必要があると思う」という記述が見られた。

指導方法については、「内容を真摯に受け取って理解できる子ども達の環境づくりが必要」、実生活での

活用については、「若くして妊娠する人も多いので、その人のためにも産まれてくる子どものためにも、きちんと定着し、実践・活用できるようにすべき」などの記述があった。

また、大学生では、性教育を受ける児童生徒の態度、および、指導する教員の態度に関する記述があり、高校生と相違がみられた。児童生徒の態度については、「恥ずかしいと思って茶化す生徒が多く、知識が正確に定着している人が少ない気がする」、「学ぶことに対して恥ずかしさを覚えている子ども達が多くいるように思う」、「生徒は恥ずかしさを隠すため、面白がって受けていたり、しらけていたりした気がする」、教員の態度については、「面白おかしくネタ授業にならないよう正しい知識を定着させるべき」、「教員自身もあまり詳しく触れない印象がある」など、自身の中学・高校時代を振り返っている記述がみられた。

3) 性の捉えと指導のあり方

黒岩ら²⁸⁾は、男子高校2校における性教育の実際と課題を調査し、性教育に対して「二極化」の実態があること、「性教育に対する消極性」と「性教育に対する過度な積極性」がそれぞれに課題を有することを報告している。性教育に消極的ということは、性教育を自身に関わることとして意識できていないということであり、将来、性交など性に関する場面に直面した際に適切な意思決定や行動選択ができないという課題が残る。そのため、性に関する情報を一方的に与えるだけでなく、情報について考え判断する能力を養い、性を自分のこととして認識できるような性教育の実施を検討していく必要があるとしている²⁸⁾。反対に、性に過度に積極的な場合、インターネットで誤った性の知識を身につけたり、誤った知識のまま性行動に発展したりする可能性がある。この場合、思春期の性的成熟に対する心理面・行動面の変化を理解すること、自分の行動への責任感や異性を尊重する態度、性に関する情報などへの適切な対処方法を学ぶことができるような性教育が必要と指摘している。いずれのタイプも、統一化された全校一斉の性教育ではなく、生徒の個性や意欲の違いを意識した性教育を実施していくことが重要としている²⁸⁾。

性教育における個別性については、本研究の大学生における調査でもみられ、「知識を得ることは必要だが、個別で理解する方がまじめに考えられる場面もありそう」、「性的マイノリティの人もいるかもしれないし、クラス内に恋人がいたら気まずそうだし、配慮が必要」などの記述がみられた。

(7) これまでに印象に残った性教育や「妊娠・出産・子育て」の授業

これまで受けた印象に残った性教育や「妊娠・出

産・子育て」の授業について質問した。教科、および、その内容について、自由記述で回答してもらった。

大学生では「保健」33%、「家庭科」11%などであり、その他、HRや特別活動であった。

学習内容は、「月経の仕組み」「避妊具の付け方」「受精から出産に至るまで」「不妊」「マタニティーブルー」「虐待」など、妊娠・出産・子育てに関する内容が多く、これらについて「具体的ですごい衝撃を受けた」、「(児童虐待など)こんな親がいるのかと刺激的だった」などの感想が得られた。

学習指導要領などに記載されている学習事項以外の内容、あるいは、具体的でリアルな内容についての印象が強くなり、かつ、自分に関わることとして捉えていることが分かる。また、「月経の仕組み」「避妊具の付け方」以外は、「家庭科の授業で学んだ」という人が多く、家庭科における役割の重要性が示唆された。

4. まとめ

妊娠・出産・子育てなどのライフイベントは、人生設計に大きな影響を与えることから、妊娠・出産・子育てなどに関する教育(性教育)はキャリア教育の一環といえる。本研究では、高等学校・家庭科における、性教育を含めたキャリア教育のあり方を明らかにするために、高校生と大学生を対象としてアンケート調査を行い、性教育の課題を検討した。

前報²⁾において、子育て経験者を対象とした調査結果より、妊娠・出産・子育てについて、母親は学校での学習不足を強く感じており、人生設計に関して「学校で教えてほしかった」「子どもに教えてほしい」という回答が高いことが明らかとなった。

本稿において、大学生は、妊娠・出産・子育て、人生設計について、中学・高校での学習内容不足を挙げていた。つまり、世代が変わっても、性に関する教育が十分に行われておらず、それを不満に感じているという実態が明らかになった。また、「自分の生活や人生において実際に使える正しい内容を学びたい」という回答が多かった。高校生や大学生に限らず、若者の生活的・精神的・性的・社会的・経済的自立に向けて、実際に自分自身で考え行動に移せるように、生活や人生と関連づけて教育支援を行っていく必要がある。教員は、学習内容、および指導方法、指導体制のあり方を再考する必要がある。

人生設計を考えていく上で、妊娠や出産・子育てなど性に関わる教育、人生設計などキャリアに関わる教育を関連づけて広い視点から網羅的に学び、その学びを深めていく必要がある。そのために、家庭科は一翼を担うと考えられる。今後は、本研究で得られた課題をもとに、性教育を含めたキャリア教育を高校・家庭科において実践する予定である。

謝辞

本研究のアンケートにご協力くださった静岡県立相良高等学校の教員および生徒の方々、静岡大学教育学部学生の方々に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 文部科学省：高等学校キャリア教育の手引き 第1章 キャリア教育とは何か 第1節 キャリア教育の必要性和意義(その1)(平成23年11月), https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2011/11/04/1312817_02.pdf(2020. 9. 1取得)
- 2) 勝山郁美, 村上陽子：高等学校・家庭科におけるキャリア教育のあり方(第一報)：子育て中の父母に対する質問紙調査から, 静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇, 52, 124-147 (2020)
- 3) 齋藤益子：わが国の性教育の現状と課題, 現代性教育研究ジャーナル, 87, 1-16 (2018)
- 4) 槌谷 亜希子, 篠木 絵理, 藤井 可苗：高校生の性と性教育に対する教員の意識, 北海道医療大学看護福祉学部紀要, 69 - 70 (2009)
- 5) 松岡真理子, 入谷仁士, 山梨八重子, 松田芳子：高等学校における性教育に関する一考察：高校生とその保護者を対象とした意識調査より, 熊大教育実践研究, 29, 77-86 (2012)
- 6) 数見隆生：10代の性をめぐる現状と性の学力形成, かもがわ出版, pp. 128-131, pp. 136-137 (2010)
- 7) 古山美穂, 佐保美奈子：高校生への性教育授業の充実に向けたアウトリーチ活動の現状と課題, 大阪府立大学看護学部紀要, 18, 113-118 (2012)
- 8) 母子衛生研究会編：母子保健の主なる統計 平成23年度版, 母子保健事業団 (2012)
- 9) 富山三佳子：高校生を対象とする性教育と今後の取組に関する文献検討, 看護学研究紀要, 3, 1-10 (2015)
- 10) 林雄亮：青少年の性行動の低年齢化・分極化と性に対する新たな態度, 材大法人日本性教育協会編, 「若者の性」白書第7回青少年の性行動全国調査報告, 小学館, pp. 25-41 (2013)
- 11) 公益財団法人 性の健康医学財団：性感染症とは～予防啓発に役立つ情報, <https://www.jfshm.org/>性感染症とは(性感染症の種類)/若者の性行動の実態と避妊/(2021. 12. 24 取得)
- 12) 須藤万智, 松井由美子, 坪川麻樹子：家庭, 学校が抱える性教育の課題に関する文献検討, 新潟医療福祉学会誌, 18, 74-74 (2018)
- 13) 橋本紀子, 篠原久枝, 田代美江子, 鈴木幸子, 広瀬裕子, 池谷壽夫, 良香織, 小宮明彦, 渡部真奈美, 茂木輝順, 森岡真梨：日本の中学校における性教育の現状と課題, 教育学研究室紀要「教育とジェンダー」研究, 9, 3-20 (2011)
- 14) 文部科学省：中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 保健体育編, 東山書房, pp. 206-216, pp. 226-227 (2018)
- 15) 文部科学省：高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 保健体育編 体育編, 東山書房, pp. 198-209, p. 215 (2019)
- 16) 仁木雪子：青少年の性行動調査にみる性教育の方向性, 八戸学院短期大学研究紀要, 40, 59-74 (2015)
- 17) 村上裕紀, 田中満由美, 亀崎明子：大学1年生が今までに受けた性教育の内容と性の知識・意識・行動の実態および性教育の課題, 山口県母性衛生学会誌, 28, 6-12 (2012)
- 18) 林桐代, 町浦美智子, 佐保美奈子：大学生の性行動およびライフスキルの実態, 大阪府立大学看護学部紀要, 18, 45-55 (2012)
- 19) 文部科学省：小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 体育編, 東洋館出版社, p. 112 (2018)
- 20) 文部科学省：中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 保健体育編, 東山書房, p. 223 (2018)
- 21) 高橋佳子：思春期女子への月経教育の今後の課題, 青森中央短期大学研究紀要, 26, 59-65 (2013)
- 22) 白井瑞子, 内藤直子, 益岡享代, 真鍋由紀子, 山本文子：高校生<男女>の月経イメージ：初めての月経教育時の月経観, 月経痛との関連, 母性衛生, 45, 87-97 (2004)
- 23) ユネスコ編：国際セクシュアリティ教育ガイドンス, 明石書店, p. 134 (2020)
- 24) 猪瀬優理：中学生・高校生の月経観・射精観とその文化的背景, 現代社会学研究, 23, 1-18 (2010)
- 25) 村瀬幸浩：男子の性教育, 大修館書店, 2-14 (2014)
- 26) 村末勇介：中学校男子の性教育内容の構成に関する研究—A市公立中学校での特別授業を通して, 高度教職実践専攻(教職大学院)紀要, 1, 69-80 (2017)
- 27) 岡部恵子：高等学校における性教育の現状と課題—大学1年次生の認識調査をもとにして—, 埼玉医科大学雑誌, 35, 69-73 (2008)
- 28) 黒岩初美, 青柳千春, 時田詠子, 田丸恭子, 丸山幸恵, 松田惇司, 佐光恵子, 高橋珠実, 新井淑弘：男子高校で実施されている性教育の実態と課題—効果的な性教育の検討—, 群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編, 52, 41-50 (2017)